



令和3年度も「リハイク」(特別支援学校/ハビリ相談事業)について紹介します！

今年度の地域支援情報通信は、昨年度に引き続き、本校での「リハイク」の活用例について紹介します。

昨年度から始まった「リハイク」ですが、「リハイクとは何？」と思われる方も多いと思います。「リハイク」とは、特別支援学校からの要請に応じて、福井県こども療育センターの専門職員が、障がいのある児童生徒の学習や生活現場における医学的な留意事項や介助・支援方法について、家族や担当教諭に対して専門的な立場から助言などを行うものです。これは医学的な観点からの支援がなかなか困難な教育現場において、療育指導を円滑に進める上では、とても大きな役割を果たしています。

今年度の本校の「リハイク」利用希望は、前後期合わせて12件と、昨年度の利用数を大きく上回りました。今年度も言語聴覚士(ST)や作業療法士(OT)、理学療法士(PT)の方々に来校していただき、いろいろなケースに応じた指導、助言等をいただいたので、その内容の一部について簡単にご紹介します。

—「摂食・咀嚼・嚥下・食事場面における動作」—

講師：福井県こども療育センター

地域支援課 言語聴覚士 土田 久美子 氏

作業療法士 木下 美智子 氏

内容： 給食時、実際に食べる様子を見ていただき、噛み方や飲み込み方について、どのような指導をしていくとよいか教えていただきました。

具体的には、一口で食べる適切な分量を体得する方法の一つとして、かじり取りの練習をご提案いただきました。例えば、パンなど大きい食品を大人が手に持ち、それをかじり取って子供に食べるように促すというものです。初めは詰め込みすぎないように、大人が調整することが必要ですが、できるようになってきたら、子供が食品を持ち、自分でかじり取れるようにしていくと良いとのことでした。

姿勢保持の方法として、椅子の座面に滑り止めマットを敷き、座っているときに腰がずり落ちることを防ぐようにするとよい、とのアドバイスをいただきました。





—「姿勢・歩行」—

講師：福井県こども療育センター
地域支援課 作業療法士 木下 美智子 氏
理学療法士 小林 拓美 氏

内容：立っている時や座っている時の姿勢や歩行について、日常的に取り入れた方がいい動きや 教員の補助の仕方などについて教えていただきました。着席したときに机の下に手が下がってしまうのは、机の(※1)くりの広さが原因ではないかと考えられるので、幅を狭くして自然に手が机の上にあるようにするといいのではないかとアドバイスをいただきました。



また、歩行器については本児に合ったものになるように調節していただきました。SRCウォーカーは、本児が自由に動いていいときに使うとよいこと、U字歩行器は、今の本児の力に見合ったものだと思うるので、始めは教師が左右の揺れや進むスピードを調整しながら進めていくとよいことを教えていただきました。

(※1)「くり」：机の天板で、カットされている部分。カットされている部分に体がはさまり、椅子と合わせて姿勢の安定を図る。

—「手づかみからスプーン・フォーク使用への移行」—

講師：福井県こども療育センター
地域支援課 作業療法士 木下美智子 氏

内容：給食時に手づかみで食べてしまう児童について、自立活動や給食の時間にできる、スプーンやフォーク使用を促す指導についてアドバイスをいただきました。



アドバイスの内容は、手づかみで食べてしまうことについて、まずその要因を考えてみる。要因が明確になったら、一つ一つの要因に対して、本人にそれを解決するための適切な課題を設定する。例えばスプーンを使い、食べ物を口に運んで食べるなど手と口を一緒に動かす時は、手か口の動きのどちらかが疎かになってしまい、結果として手づかみで食べ物を口に運んでしまうことが多くなってしまいます。こういった状況を解決するためには、2カ所を同時に動かす活動を多く取り入れるとよい。普段、遊びの中に取り入れている「息を吹いてこまを回す」という行為は、口の周りの筋肉を強化するという点でとても効果的だにご高評をいただきました。また食べ物を口に入れた後は、口を閉じてこぼさないような意識付けを本人にしていくことが必要であると伺いました。

児童が聴覚優位か、視覚優位かを見極めることで、更に音が鳴る教材などの使用についても選択肢を広げることができ、様々な可能性を考えることで本人の現状により適した支援につながればと思います。

